



日本カトリック海外宣教者を支援する会

巻頭言

時代の流れに寄り添う福音宣教

イエスのカリタス修道女会 末 吉 順 子

6年のブランクをおいて、再び宣教女として、ボリビア、サンタ・クルス州の共同体の一員となった。もう若くはないことを自覚し、自分にできることを精一杯やらせていただこうと思いつきながら、少なからず胸を躍らせて戻った。この国は社会的にも経済的にも、少しづつ発展へと向かっているだろうと思っていたが、3年にも及ぶパンデミック、Covid19感染の影響は、サンタ・クルス市内よりも市外地の小さな村々に大きな爪痕を残しているように感じられる。高齢化は、ボリビアにも少しづつ顔をのぞかせているが、まだまだ街には若者や子供たちがあふれている。

今年から、以前住んだことのある、オキナワ移住地での宣教のお手伝いを、通いでさせていただくことになった。オキナワ移住地の教会は、現在、韓国、光州教区から派遣された3名の司祭が司牧している。オキナワ第一、第二、第三移住地では、この2、3年で他界された方が多く、若者たちは街に出て職を見つけ、移住地の人口も減少している。近年は、子供たちもサンタ・クルスの大きな学校で学ぶようになり、移住地の学校の学生数はボリビア人の方が多数を占め

♥♥もくじ♥♥

巻頭言	1
第84回運営委員会議事録	3
宣教者からのお便り	4
ザ・メッセージ	9
ECHO	9
偲びを込めて	10
連載「海外宣教」	11
新入会員・事務局より	12



る。大型農場を営む日本人の日雇いとして、毎日の生計を立てていた多くのボリビア人が、パンデミックの影響で仕事を失い、自分の小さな貧しい家を残して、生活のために町に出て行ったケースが、特に小さな村には多い。数年前、メリノール会の一宣教師が、高齢のためアメリカに戻る前に、「小学校までしか学ぶことのできなかった小さな村の青少年たちを高校まで学ばせ、未来への可能性を広げてあげたい」と願い、高校がある大きな村に、学生のための寄宿舎を建てた。その頃は、男女それぞれ20名ほどの学生が寄宿していたが、コロナの影響で寄宿舎は閉鎖となった。そのため、村には3年間、高校での勉強ができず、村に残って家の手伝いをしている青少年が数名いる。村に残された家族のいない高齢の夫婦や盲目の一人暮らしの老人に、村人たちが毎日声をかけ、気遣っている。この状況は、村人たちにとっても、想像できなかった現実だと言っていた。

50数年間、このオキナワ移住地で行ってきた宣教が実を結んでいると感じさせる、喜ばしい、明るい現実もある。私たちの修道会は、移住地開拓時代から、人々の支えとなりながら司牧してきたメリノール会の司祭に協力し、13の村にカテキスタたちを養成してきた。彼らを通して根付いた信仰の種は、今、第二世代のカテキスタたちに受け継がれ、村の教会は毎日曜日、ミサあるいはみ言葉の祭儀が行われ、洗礼、初聖体、堅信の準備も行われている。私が従事していたころ、オラトリオのリーダーとして子供たちに教えていた青少年たちが、今は立派な青年となり、その中の数人はカテキスタとして、村の教会を支えている。その教え子に、顔を見るなり、「シスターたちが修道院を閉鎖して、私たちは見捨てられたと思った。」と言われた。その時は胸が痛かったが“だから彼らが、より一層力を発揮した”と思う。修道院を閉鎖した後も、身体に障害を持つボリビア人の若い会員は、村の青少年たちの養成のために、霊的なビデオや資料を、SNSを通して送り続けている。

時代も、人々の生活も、私たちが置かれる状況も確かに変わり続ける。私たちの修道会も、高齢化と召命減少のため、ボリビアの二つの修道院が閉鎖された。5年先、10年先を見越した宣教をしていく必要もあるのだろうが、時代の流れに合わせて、ありのままで寄り添っていくのも悪くないと思う。『Sinodoの3つの柱「一致・参加・宣教」によって共に歩む教会』の中で、自分にできる宣教の形で歩みを進めたい。救い主と信じていたイエスが十字架にかけられた後、絶望してエマオへと旅する二人の弟子に、同伴して歩む復活したイエスの姿は、まさに目指すべき現代の宣教者の姿であるように思う。起こったことを思いめぐらしながら、それでも復活の希望へと向かわせる、寄り添う宣教を続けていきたい。

第 84 回運営委員会議事録

日 時：2022 年 3 月 12 日（土） 15:00 ～ 16:00

場 所：「きずな」運営委員会 zoom 会議

出席者：10 名

議 事

I. 「きずな」158 号について

編集者から→今回は事務局からたくさんの原稿を受け取り、充実した誌面になった。またシスター弘田の連載は文字を小さくせざるを得なかった、無事 16 ページに収めることができクリスマスカードもカラーで迫力があつた。

II. 「きずな」159 号について

- ・巻頭言はシスター末吉順子（イエスのカリタス修道女会）にお願いすることができた。
- ・ベリス・メルセス宣教修道女会シスター弘田シズエに連載を 6 回お書きいただき前号で終了。感謝したい。
- ・今号からは、さいたま教区 山野内倫昭司教に連載をお引き受けいただいた。（当会顧問司教）

III. 援助申請

- ・コロナ禍による混乱の中、現段階で各地からの援助申請は残念ながらなかった。よって 2022 年 3 月の運営委員会での審議はなし。

IV. その他

- ・運営委員の後藤美佐子様が 2 月 16 日帰天された。今までの活動に心より感謝申し上げ、会より供花を送らせていただいた。
- ・会計監査を今年度より運営委員マリアの宣教者フランシスコ修道会 Sr. 桐野にお願いした。
- ・今までホームページを更新して下さっていた、全相奎（ジョンサンギユ）さんに新しく運営委員にも加わっていただいた。ホームページも引き続きお願いする。
- ・ようやく宣教者名簿が出来上がるので、早めに送れるよう努力する。
- ・海外雑誌発送 3 月 1 日 47 通事務所よりボランティア発送。
- ・「きずな」158 号国内 2,860 通業者発送、3 月 4 日事務所にてボランティア 2 人で大口など国内 49 通、海外 115 通発送。
- ・コロナ収束の折にあらためて国内ボランティア発送（封入その他）を考える。場所は未定。
- ・メーリングリストの活用を考える。
- ・「きずな」巻頭言に皆様より候補があれば、お知らせいただきたい。

次回運営委員会は 6 月 11 日 15 時～



宣教者からのお便り



イタリア

◆アッシジ◆

(イタリアからの報告)

精力的に難民を受け入れ

マリアの宣教者フランシスコ修道会 徳田 あずさ

やっとパンデミックが終わると思ったら、戦争が勃発。イタリアはウクライナ難民の方の受け入れを精力的に行っています。私の所属する『マリアの宣教者フランシスコ修道会 (FMM)』のアッシジの共同体メンバー全員も様々な仕事を分担し、積極的に受け入れに参加しています。そのご報告を少しさせていただきます。

アッシジでは、まずアッシジ教区カリタスを中心に、様々な活動の指揮を執っています。

アッシジにある各修道会はカリタスからの発信を受けて動いています。

ご主人やお父さんをウクライナに残し、主に女性たちと子供たちが難民としてほうぼうの国に避難して来ているのですが、第一避難先のポーランドから飛行機でローマの空港についた彼女たちはまず、カリタスの手配で集合したボランティアや修道者たちの出迎えを受けました。到着予定は17時でしたが、結局、午前4時までかかったと聞いています。空港でコロナの検査を受けたあと、ひとまずそれぞれ指定先の町のホテルで4～5日ほど滞在。もう一度コロナ検査をして陰性を確認した後、それぞれが受け入れ先の修道会の建物や一般の有志の家へ

移動しました。

アッシジ FMM の家では前述のように、離れの一軒家を提供しましたので、家族だけであることにとても安堵している様子です。それまでは一時的な収容先でいつも他の人たちと一緒にだったため気を張っていたようです。この家はベッドが20台入っているのですが、ストレスに考慮し、この家族以外の難民を入れないことを、カリタスが決めました。

彼女たちがまず必要としたのは WiFi の環境。欧州の中では経済的には貧しい国に属するウクライナですが、みなスマホを持っています。(機会があるごとに繰り返しお伝えしますが、日本では基本料金が高額すぎです。これでは、せっかくの情報の恩恵が、貧しい人々にまでいきわたりません。私は、ほぼ使いたい放題で月額800円ほど。いわゆるガラ系より安価です。) 故国に残っている家族との安否確認などの連絡はこれが唯一の手段です。イタリア国の SIM は空港で各自に渡されたようです。ただ、うちの母屋の電波が離れの家まで届かなかったため、すぐ業者に連絡して離れの家にもモデムの設置をしました。

英語のできる人が多いと聞いていたのですが、この家族が話す言葉はウクライナ語とロシア語だけ。私たちはもっぱらスマホにあるグーグル翻訳を使って会話しています。マイクもついているので、例えば、私の言った日本語が、即座に自動的にウクライナ語に翻訳されて文字に

なり、彼女たちはそれを読む、という具合です。

彼女たちのための食費や光熱費等は主にカリタスが援助しています。もちろん、FMM イタリア管区も難民援助のため、かなりの額を拠出してくれています。

イタリア語習得やその間のベビーシッターなどは、教区教会が中心となり、場所も提供。大勢のボランティアが修道者たちと一体となって仕事の分担をしています。就学年の子供たちの学校は、はじめはウクライナ語でのオンライン授業にスマホで参加していましたが、到着後一週間で、すぐに地元の学校への編入手続きが終了。ご復活祭後、通学開始予定です。すでに全員、保健所に登録して、担当家庭医を持っています。イタリア全体がこれほどスムーズなわけではなく、他の慈善団体組織がリーダーとなって援助している隣町では、難民到着後ひと月経っても、イタリア語の授業も、地元の小学校への編入もない、ということですので、今回ばかりは、アッシジ教区カリタスの奮闘ぶりが高く評価されます。町の誰もが難民の受け入れの何かに参加したい、という空気も感じられます。

食料は彼女たちのリクエストに応じて買い物をします。なるべく故国の料理を調理して食べたいですね。そういえば、彼女たちが到着して三日目に一人の方のお誕生日があったのですが、その日、厨房責任者のFMM 姉妹が美しく大きなフルーツケーキを作り、私たち共同体全員でそれを持って行って、歌を歌って祝いました。彼女は「泣きそう」と言ってとても感激した様子でした。言葉はわかり合えなくても暖かさの通い合った、大切な瞬間でした。

滞在許可証等に関しては、ウクライナ難民の

皆さんには特別枠が設けられ、一年間、保証されています。許可証をとるための手続きも他の外国人とは別の時間を設けられ、スムーズでした。手続き先まではフランシスコの小さき兄弟会 OFM の修道士たちが車で送り迎えをしてくれます。手続き窓口には、すでにカリタスの移民担当者が待っていて、手続きを手伝います。

たとえ戦争が終わっても町や家は破壊されているでしょうから、数年という滞在期間を想定しています。もともとウクライナからの移民が多かったイタリアでは、このままイタリアに帰化していく人も多く出ると考えているようです。しかし、まずは当面の生活を整えることに集中しています。

男女の各修道会は、各自が忙しい中でもよく連携をとり、一般信徒のボランティアの方々とも協働して、良い仕事を進めていると感じます。ウクライナの方々も何事にも前向きで、いろいろなことに参加してくださっています。ちょっとこちらが心配になるくらい。この第一段階が落ち着くころ、様々な問題が出てくるのでしょうか、その時々で、今度はもっと、双方、時間をかけて対処することができるようになっていきたいと思います。

早く戦争が終息を迎え、双方の国の兵士が一人でも多く生き残って、家族と再会することができることを、今は、願うだけです。

主のご復活祭が、多くの人の心の慰めと希望になるよう、共に、祈りのミッションに参加しつつ。

追伸：フランシスコ教皇の回勅「兄弟の皆さん」130 番をぜひ一度、読んでみてくださいませ。同様の援助活動を行なっています。

ポーランド

◆サノク◆

ウクライナ国境近くの状況

聖母の騎士聖フランシスコ修道女会 中 川 喜 恵

「プーチン大統領にノーベル賞をあげよう。彼はたった一日で、コロナの不安を吹き飛ばしてくれたのだから」。これは、3月初めに聞いた「冗談」です。確かに、2月24日のあの日から、心に重くのしかかるのはコロナではなく、戦争に対する恐怖や先の見えない不安です。

隣国ウクライナにロシアが軍事侵攻をしてから、2か月が過ぎました。国境近くの街はもちろん、私が住む国境から離れた場所でも、何らかの影響があります。以前、国境近くのプシェミシルに住むシスター達から国境や駅の様子、避難者から聞いた話を分かち合ってもらいまし

たが、あまりにも過酷な状況に言葉を失うことが度々ありました。2月下旬のプシェミシル駅の様子について、一人のシスターが「アウシュビッツのようだ」と表現したことが、特に印象に残っています。侵攻以降、彼女たちは地域の他の修道会と協力しながら、支援を必要としている人々のために活動を始めました。教会に限らず、多くのポーランド人が、団体でも個人でも、「目の前の困っている人たちを助けよう」としていました。



メディアカの国境周辺

2か月経った今は、少し状況が変わりました。新たな問題が生じています。ボランティアや資金が不足しているのです。侵攻直後の、「全力で支援活動しよう」という勢いが失われてきたと言っても良いかもしれません。無理もない事です。誰もが自分の生活や、仕事がありますから。また、避難していた方々の中には、就労や言語の問題等の理由で、帰国する人も出てきました。「避難者が帰国しているらしい」「危ないのは東側だけらしい」…そのような情報や、



プシェミシルの駅の様子

写真撮影：Jerzy Szlachcic

隣国のいつ終わるのかわからない戦争・異常事態に慣れてしまい関心が薄れている、そんな気がしています。

都会の駅で炊き出し活動をしている知人の話では、連日多くの人が食べ物を求め、時には食べ物を巡って口論になることさえあるそうです。しかし、駅前のショッピングモールでは、日常を楽しむ人たちの姿が見られるそうです。一つの場所で、二つの世界が存在しているような状態だと言います。炊き出しの支援をしている海外の実業家が、5月で支援を打ち切ると発表したそうで、今後、また新たな問題が出てくることが懸念されます。

ポーランドのウクライナからの避難者は300万人以上。その一人一人が助けを必要としています。一刻も早い戦争の終結はもちろんですが、私たちの心が苦しむ人々に向かって開かれるように、いつくしみの主に共にお祈りください。

オーストラリア

◆シドニー◆

普段通りの聖週間、復活祭のミサ

聖パウロ女子修道会 松 本 恵

今年のご復活祭は、昨年にも増して、祈ることの多い状況のうちに迎えましたね。祈りの力を信じたいと思います。

こちらは、2週間前に私たちの修道院の8人のうち2人がコロナ陽性と分かり、それぞれ自宅で7日間隔離、私を含む他の陰性6人も濃厚接触者ということで7日間の院内隔離、修道院の外に出られず、書店も開けられずという少し不便な体験をしましたが、皆3回のワクチンを

受けているからか、大事に至らずに済みました。

私たちの小教区は、マスクを付けながらも、聖週間、聖なる三日間、復活祭のミサが普段通り行われましたが、ある小教区では、主任司祭がコロナに感染したため、洗礼式を含む一切の典礼が中止されたと聞きました。



みなさん宛てのご復活カード、送付しましたのでご覧ください。今回も、背景に、修道院の庭の花を使いました。平和のために、祈りつつ。

グアテマラ

◆コロンバ◆

聖堂に復活されたイエス像

ベリス・メルセス宣教修道女会 眞 神 シ ゲ

ご復活おめでとうございます。

聖堂に復活されたイエス様の御像が置かれていました。コロナ禍で参加者が少なかったです

が。喜びの1日でした。ガテマラも雨季に入り暑くなってきました。



ソヤティタンヘガソリン代を渡してきました。micaさんとエリザベスさんがとても喜んでいました。micaさんはメキシコ人。エリザベスさんはコンゴ生まれのコンゴ人です。英語もフランス語もスペイン語もペラペラですが、日本語はサッパリで残念です。



ドイツ ◆デュセルドルフ◆ 戦争という大変な世界に

聖パウロ女子修道会 比 護 キクエ

コロナどころでなく、戦争という大変な世界になってしまいましたね。

第二次世界大戦のとき、多くの日本の方々が

中国や韓国から引き揚げてきたときの体験談を聞いたのを思い出します。何百万人ものウクライナ人が今同じ体験をしておられるのだと思うと、心が痛みます。

ニュウルンベルグとプラハの共同体が、それぞれ二人づつウクライナの難民を受け入れて一緒に生活しています。主が望まれる真の平和が来ますように祈ります。

東ティモール ◆ディリ◆

ディリ・アタウロ島での生活

聖マリア修道女会 荒 井 祥 恵

以前の海辺での遊びとは別に、補修クラスが始まった。皆で座って学ぶ、キラキラした目がまぶしい。





*** ブラジル**

純心聖母会 塚本深冬

2019年6月20日修友の祝福のもと、奉献生活50年をお祝いました。

*** ブラジル**

アジの聖フランシスコ・カテキスタ教会 阿部島信子

在ブラジル 2022年2月2日 奉献生活請願50年を迎えました。

1939年北海道生まれ、1957年12月24日受洗、1968年ブラジル到着、アシジの聖フランシスコ・カテキスタ宣教会に入会。1972年2月2日初請願。モジ・ダス・クルーゼス（SP）の聖母幼稚園に奉職後ジャラグア・カテキスタ会本部にて日本語教師として勤務。1975年～1982年までパニブ事務本部で働きオリゾンテ誌編集に参加。現在カテキスタ会本部勤務。

*** ボリビア サンタクルス**

イエスのカリタス修道女会 末吉順子

聖週間から、ボリビアの教会は通常の活動に戻りました。今は、この聖週間の行事のために、どの教会も3年ぶりの通常活動再開で、活気に満ちています。私の共同体には、82歳の日本人宣教女の先輩が、まだまだお元気で頑張っ

てくださっています。「寄り添うこと」のすばらしさを、彼女と生活しながら感じています。

*** ポーランド サノク**

聖母の騎士聖フランシスコ修道女会 中川喜恵

お互いに、良き聖週間・復活祭の準備ができますように。日本は少し気温が下がった、というようなことを聞きました。時節柄、どうぞご自愛ください。こちらも昨日から冬に逆戻りで、氷点下・雪景色です。感謝のうちに祈りつつ。

*** 日 本**

フランシスコ会 村上芳隆（当会会長）

桜が満開ですが、また寒くなりました。修道院の隣（下）にある三河台公園の桜も満開です。例年のように花見をする人達はいないようです。

*** ネパール バンディプール**

ノートルダム教育修道女会 今村精子

私達はこの度、ネパール・バンディプールのノートルダム校をネパールのカトリック教区におまかせし、ネパールを引き上げることに致しました。5月の末頃、最後のシスターが日本に戻って来ます。今までいろいろとありがとうございました。皆様のお働きの上に神様の豊かな祝福をお祈り致します。感謝を込めて。



◇どうぞお身体に気を付け支援をお続けになりますように。（東京都目黒区 藤田 睦）

使いくださったらうれしいです。

（長崎県長崎市 長崎信愛幼稚園）

◇子どもたちからの献金です必要なところにお

◇異国の地で過酷な環境の中で、委ねられた使

命に従事されるシスター方に感動と共に感謝の意に堪えません。主がいつも共にいてシスター方を守り支えて下さいますように、どうぞお身体にお気をつけて。

(栃木県那須町 那須トラピスト修道院)

◇主の平安 神様のおめぐみがみなさまの上に豊かにありますように、よいご復活祭をお迎えください。

(匿名)

◇海外の子どもたちに寄り添った日々お元氣にお過ごしください。

(東京都中野区 篠岡淑子)

◇「きずな」ありがとうございます。わずかですがイースター献金お送りします。

(東京都中野区 更田史子)

◇友人でカリタス会のシスターが古巣のブラジルへ再び派遣されました。高齢なので心配です。

(長野県松本市 山田満喜)

◇お働きに感謝致します。

(静岡県島田市 愛徳カルメル修道会(島田))

◇皆様のご活躍ありがとうございます。感謝のうちに祈ります。

(京都府京都市 ヌヴェール愛徳修道会(九条))

訃 報

昨年度は二人の大切な運営委員を失うことになってしまいました。

10年以上支援する会の運営委員をしてくださった長井甫様が2021年に、そして2022年2月に昨年度より参加くださった後藤美佐子様があいついで帰天されました。

お二人には今までのご協力への感謝と安らかな天での憩いを祈ります。

日本カトリック海外宣教者を支援する会

偲びを込めて

お世話になった長井さんを偲んで

「何年前になるのでしょうか、主人とこの会のお手伝いをさせて頂く事になったのは。運営委員の皆様もより若くその中のお一人が長井さんでした。次々と寄せられる援助申請を巡って、運営委員会の度に皆盛んに意見を交換され新入りの私などはただ目を丸くしてやり取りに聞き入るばかりでした。どの委員の方も宣教者の方々の熱い想いになんとか応えたい一心。会の支援者の寄せて下さる資金をどうお届けするのか。三ヶ月に一度の運営委員会は毎回大切な議論の場であり、また委員お互いの親交を深める場でもありました。長井さんは何も分からない新入りにもいつも優しく声を掛けて下さっていました。長井さん、今は委員会もリモートなんですよ！これからも私達が宣教者の方達の想いに寄り添っていけます様に見守っていて下さい。」

(波多野真理子)

後藤美佐子さんを偲んで

私が出会ったのは、10年程前でした。それは聖心侍女修道会の修道院で行われていた聖書を読む会でのことでしたが、その後、別の講話などでもご一緒したりして、学びや祈りを通して親交を深めました。そして数年前、彼女に誘われて、共に「きずな」の発送作業に参加するようになりました。後藤さんは発送作業の当日は、早めに作業場であるマリアの宣教者フランシスコ修道会瀬田修道院に到着して、シスターのなさる準備を手伝っていらしたと思います。皆が集まり作業が始まると、その段取りを率先して切り回し、毎回皆が作業しやすいように采配を振るって下さいました。社交的でとても活発な方でした。後藤さんとの出会いを天の御父に感謝し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(余語洋子)

「平和があなたがたに」

マリオ 山野内 倫 昭 さいたま教区司教

「戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、
『あなたがたに平和があるように』といわれた。」（ヨハネ 20.26）

主のご復活のお喜びを申し上げます。

復活されたキリストの現存が皆さんに希望をもたらしますように、そして、私たちが、現在、ウクライナで生起している信じがたい出来事の中にもいてくださる、復活されたイエスの証人になれますようにと願いながら、このメッセージをお届けします。

人類がこのように進歩している段階で、強国が小さい国に対して、どうしてこのような暴力的な侵略をするのか、共にキリスト教の国であり、文化的にも共通のものを持っていることを考え併せるととても信じられません。しかも、世界の国々の態度もそれぞれの利害が絡んで分裂していることにも心が痛みます。

隣国ポーランドを筆頭に、世界中へのウクライナ国民の避難はすでに優に 450 万人を超えていると言われています。日本へはまだ僅かですが徐々に増えています。兄弟愛的姿勢で、私たちの共同体に彼らを受け入れましょう。彼らの顔を見ることで、今日の世界が苦しみを受けている意味を、主が私たちに理解させてくれるのではないのでしょうか。彼らとの出会いを通して、国々を結ぶ連帯の新しい絆を作る、本当の力を発見することができますように。彼らの多くが希望の灯を絶やさないために、私たちの小教区に祈る場所を求め、訪れることがあれば、その苦しみを分かち合い、彼らが愛する自分の国に早く戻れるよう、温かく迎え、共に祈ることができますように。

彼らは、戦争が終わったら直ちにウクライナに戻るでしょう。そして自分の国の再建に着手し、神が与えられた聖なる土地としてウクライナを守ることでしょう。復活されたイエスの平和が、ウクライナの人々と世界に、早く実現するように願いましょう。

最後に、教皇フランシスコの回勅「兄弟の皆さん」の言葉を思い起こしたいと思います。

- ◇「人は皆、民に属することで十全に一人の人間となるのであり、他方、一人ひとりの顔に敬意を払わなければ真の民ではないのです。」（182）。
- ◇「戦争は過去の亡霊ではなく、たえず脅威であり続けています。」（256）。
- ◇「戦争が拡散する素地が新たに作られつつあるからには、忘れずにいてほしいのです。『戦争はあらゆる権利の否定であり、環境に対する無残な攻撃です。すべての人の真の全人的発展を望むのであれば、国家間、民族間での戦争回避のためのたゆまぬ努力が必要です。』」（257）。
- ◇「二度と戦争をしてはなりません」（258）。

この回勅の中で教皇が勧められている「創造主への祈り」を共に捧げましょう。

人類の父である主よ、
あなたはお造りになったすべての人に、
分け隔てなく尊厳をお与えになりました。
わたしたちの心に、兄弟姉妹への愛を目覚めさせてください。
再会、対話、正義、平和の夢を、呼び覚ましてください。

飢えも貧困もなく、暴力も戦争もない、
より健全な社会とより尊厳ある世界を築くために、
わたしたちを奮い立たせてください。

あなたが一人ひとりのうちに蒔かれたよいもの、美しいものに気づき、
一致を深め、共通の課題に取り組み、
希望を共有してきずなを強めるために、
わたしたちの心が地上のあらゆる民族と国々に開かれますように。 アーメン

新入会員 (敬称略)

個人会員 6名

近藤 優子 (東京都武蔵野市) 嘉陽田広子 (沖縄県那覇市) 池田二三代 (北海道札幌市)
尾又 仁子 (東京都中野区) 西村とし子 (静岡県沼津市) 石田富志子 (東京都国分寺市)

事務局より

- ◎きずなの投稿にもございましたが、コロナがほんの少し収まって来たものの、今世紀にまさか戦争が起こるとは考えませんでした。一方的な戦いに釈然としないものを感じます。戦地で苦しみ堪えている女性や子どもたちにも早く平和が訪れますように。
- ◎2022年度が始まりました。しかし各国から援助申請の手紙は参りません。皆様のご寄付を送るために一日も早く感染症が収束し、平和な世界で宣教者の活動が自由にできますよう、願っております。
- ◎「きずな」160号は9月発行になりますので、8月事務所のお休みは今のところ8月12日～19日までの予定です。また読者の皆さまの原稿もお待ちしております。
- ◎ご家庭に眠っている「切手やはがき」また書き損じた「はがき」等がございましたら、下記事務所までお送りください、通信費として大切に使用させていただきます。宜しく願い致します。
- ◎新しい◎海外宣教者名簿ができましたので宣教者の皆様にお送り致しました。

発行：日本カトリック海外宣教者を支援する会

〒106-0032 東京都港区六本木4-2-39

Tel. 03-5770-8753 Fax. 03-5770-8754

e-mail kaigai-senkyo@cronos.ocn.ne.jp URL <http://www.kaigai-senkyo.jp>

- ・銀行振替口座 みずほ銀行高田馬場支店 普通 2084112
日本カトリック海外宣教者を支援する会
- ・郵便振替口座 00140-5-67881 海外宣教者を支援する会